

30

サンタ・マリア・ヌオヴァ病院の創設と発展

柳澤 波香

青山学院大学／津田塾大学

フィレンツェのサンタ・マリア・ヌオヴァ病院 (Ospedale Santa Maria Nuova, 以下 OSMN と表記する) は1288年の開院時より現在に至るまで、フィレンツェおよびトスカーナ地方の中核病院として機能している。OSMNの創設者は、フィレンツェの裕福な銀行家、実業家であったフォルコ・ポルティナリ (Folco Portinari, 生年不詳, 1289年没) である。ポルティナリは、家政婦のモナ・テッサが教会で疾病貧民の介護を献身的に行う姿に心を動かされ、地域の疾病貧民を救済するため、私財を投じて病院を設立した。ポルティナリは、『神曲』の作者ダンテが崇拜したベアトリーチェの父である。

14世紀半ば、OSMNの病床数は120床 (男性用62, 女性用58) となり、内科医と外科医が1名ずつ勤務し、1376年には院内に薬局が設置された。同時期のOSMNに関して、ルネサンスの人文主義者C・ランディーノは、「毎月300人の入院患者があり、病状に応じて病人ごとに食事が提供され、薬の処方になされている」、「フィレンツェ滞在中に病気にかかった外国人は富裕な者であっても、この病院に入院し、治療を受ける」と記している。16世紀に入り、ポルティナリ家の庇護の下、OSMNの規模はさらに拡大した。特に外来部門が拡充され、外来診療は3名の研修医、6名の内科医、1名の外科医の計10名が交代で担った。6名の内科医はフィレンツェで名医としての誉れの高い医師とされ、彼らは無報酬でOSMNでの診療に当たった。平信徒、修道士、修道女が病人の介護を行い、外科医の助手を務めることもあった。同時期には患者カルテの作成が開始され、OSMNの医療水準の高さはヨーロッパ随一と評された。16世紀前半にフィレンツェを訪れたマルティン・ルター、イングランドの外交官トマス・ホウピイらも、病院医師の知識の豊富さ、介護者の勤勉性、院内設備を絶賛している。この頃からOSMNには、フィレンツェおよび近郊の貧者のみならず、富裕層も入院し、治療を受け始めた。聖職者や富裕層を対象とした個室の特別病室が設置され、費用は無料であった。一般病棟とは別に、重症患者用病棟、重度の精神疾患患者用病棟も設置された。医学研究、教育面においてもOSMNは先駆的存在であり、院内図書館は貴重な蔵書を地域の開業医に貸出し、医学知識の普及を図り、16世紀末には院内に外科学校が設立された。フィレンツェで開業するためには、OSMNでの研修が必須となり、病院医師が開業資格の審査にあたった。OSMNでの教育、研修を受けた看護師は市内の中・上流家庭での要請に応じて派出され、病人の介護を行った。

17世紀初頭、ポルティナリ家の没落に伴い、トスカーナ公爵によるOSMNの運営が始まった。病院建物の改築、増築が行われ、1660年に附属の婦人病院が開院した。病棟は疾病ごとに区分され、介護記録、栄養状態のカルテへの記載が始まった。18世紀前半、解剖学をOSMNで教授したA・コッキはニュートンやヴォルテールと親交をもち、その教養を教育に反映させた。18世紀半ば、トスカーナ大公レオポルドは地域の小規模病院を統合してOSMNに集約し、内科医V・キアルギが精神障害者への人道的処遇を推進し、G・ヴェспаが産科学を教授した。

19世紀に入り、往診を重視する卒後教育の進展を図ったM・ブファリーニが内科学を、外科医F・ザネネッティが病理学を教授したが、イタリア独立の気運が高まるとOSMNの医師らの多くがその運動を支持し、ときに指導的役割を果たした。20世紀に入り、現代医療への対応、教育病院としての設備を拡充するため、フィレンツェ郊外にはカレoggi総合病院が1912年に新設された。トスカーナ地方の医療拠点はカレoggi総合病院へと移行したが、OSMNは市立総合病院として現在もなお、救急、一般診療を行っている。